

中学生向け能楽ビデオ教材の開発について

——能《小鍛冶》狂言《附子》を中心に——

飯塚 恵理人*

Development of VTR Teaching Materials for Noh
Using to Junior High School Students

Erito IIZUKA

1 はじめに

名古屋は「芸どころ」と呼ばれ、能・狂言をはじめ、茶道・香道・華道・長唄・日本舞踊など稽古事が大変盛んな土地柄である。しかしながら、戦後の舞台を担ってきた世代が引退の時期を迎えており、玄人・愛好者ともに高齢化が進んでいる。このような中、伝統芸能を次の世代に伝えるために能楽を中学生に見せる活動が行われている。特に豊田市能楽堂を持つ愛知県豊田市などは、市内の全中学生が卒業までに□回は能・狂言に触れられるように鑑賞会を行っている。ここで、能・狂言は古文による劇であり、また所作・装束・面などにもそれぞれ約束事がある。能楽の鑑賞のためには、これらの知識を事前に知っておいたほうがより効果的である。しかしながら、引率教員の中にも能を観た事のない人が多い。能楽鑑賞の事前教材用のビデオがあれば、教員に能楽の知識がなくとも生徒に基礎知識を教えることが出来る。そこで、本研究では、中学生向けの能楽ビデオ教材の開発を行うこととした。このビデオは、あくまでこれから能・狂言を観る生徒の事前学習用であり、一般的な能楽初心者向けビデオではない。ビデオを作成する曲は、豊田市で中学生に実際に見せている能の《小鍛冶》と狂言の《附子》とした。

解説用ビデオを作成するためには、まず素材となるビデオの撮影が必要となる。次に能・狂言のビデオの中から場面を選んで編集し、その部分のナレーション原稿を書く必要がある。また、事前学習を行っても、なお初心者には能は難しく感じられる場合が多い。そのような場合、イヤホンガイドを用いて解説することが効果的である。そこで、このビデオ素材の撮影の際、能の《小鍛冶》については試験的にイヤホンガイドを行った。この時に用いた原稿は、直接ビデオ作成とは関係しないものの、中学生に能を見せる際には参考となる。そこで、このイヤホンガイド原稿もここに収めることとした。本稿では、その順に従って、手順を説明する。

* 文化情報学部 文化情報学科

2 素材とするビデオの撮影

ビデオ教材を作成するためには、素材となる能・狂言を撮影する必要がある。そこで、平成15年7月21日に名古屋能楽堂で行われた東海能楽研究会主催の「伝統芸能上演会」において、《小鍛冶》《附子》を上演していただき、それを撮影することとした。豊田市の鑑賞会で行ったのと同じ形とするために、《小鍛冶》本文の一部は省略して演じて頂いた。省略した本文は、クリの「それ漢王三尺の剣」からクセの前の「漢家本朝に於て 剣の威徳 申すに及ばぬ奇特とかや。」までである。当日のプログラムには記さなかったが、演出としては喜多流の「白頭」という小書演出（特殊演出）の形になった。このため、後ジテ（後半の主人公）の足遣いは全て「狐足」というかかとをあげて細かく運ぶ（歩く）形となり、また面も通常の小飛出の面ではなく、泥小飛出という金泥を塗った飛出の面が用いられた。

3 《小鍛冶》解説ビデオのナレーション原稿

小学校・中学校の授業は普通50分である。能・狂言を観るための事前学習に費やすことが出来る時間はやはり授業1コマが限度であろう。そのように考えると、授業の出席や連絡事項に費やす時間もあることを考えれば、能20分、狂言15分、合わせて35分前後のビデオ教材が、一番使いやすい教材ということになるだろう。実際の舞台では、能《小鍛冶》が短い演出をとって50分前後、狂言《附子》は通常30分前後かかるので、ビデオに用いる部分は当然その中から選ばなくてはならない。

通常のビデオであるならば、見所を選択して入れるということで良いのだが、このビデオでは、能をはじめて見る人が不思議に思うであろう点を重点的に解説する必要がある。そこで、粗筋については最初に静止画の部分を作ってそこで解説することとし、動画のクリップの部分では、装束・能面・所作に関する解説を中心とした。

以下、解説ビデオの構成と、各部分でのナレーション原稿を挙げる。

I 静止画部分

①一条院の臣下の名乗り 一条院に仕える臣下の者が登場します。臣下は、今日、院が、三条小鍛冶宗近に剣を作らせると、国土が豊かで平和になるという不思議な夢の告げを受けられたので、これから宗近に剣を作るよう頼みに行こうと言います。

②宗近の悩み 一条院の使いは、宗近に剣の制作を依頼します。宗近は刀鍛冶として大変名譽なことと思いますが、一緒に刀を作ってくれる人がいないと言います。刀は二人一組で作るのですが、名剣を作るためには二人ともに優れた技術を持つことが必要なのです。宗近は断ろうとしますが、使いの者が院の不思議な夢を見ての命令なのだから受けるようにと言われ、断りきれずに受けることにします。

③不思議な童子との出会い 宗近は名剣を無事に打つことが出来るようにと思い、氏神である稲荷明神に祈りに行きます。すると剣の依頼を受けたことを知っている不思議な子供が現れ、中国や日本において剣が国土に災いをもたらす敵を倒して平和をもたらした例を語り、宗近を励まします。そして、剣を打つ壇を飾って待っていたならば、必ず現れて

助けようと言い、姿を消してしまいます。この子供は稲荷明神の化身でした。

④刀の制作 宗近が不思議な子供の述べた通り、壇を飾って祈っていると、天から不思議な子供、稲荷明神の化身の小狐が現れます。そしてこの子供の助けで、宗近は名剣を打ち上げます。打ち上がった名剣には、表に宗近、裏に小狐と、作者の名前が彫られます。宗近はこの剣を院の使いに渡します。剣の不思議な力で、国土は豊かで平和な代が続くことになります。

II 動画部分

①一条院の臣下の名乗り 院に仕える臣下が登場し、これから宗近に剣の制作の依頼に行くと言います。帽子を洞烏帽子と言います。また、この上着を狩衣と言います。下は大口袴という袴を着けています。このような姿を大臣姿と言います。この姿をしている者は朝廷に仕える身分の高い者という約束事になっています。

②宗近の悩み 宗近は自分の家に現れたのが院からの使いであると聞いて深深とお辞儀をします。そして剣の注文を受けて、はたして作ることが出来るだろうかと言います。宗近の帽子は侍烏帽子、直垂の上のみ着て、下に大口袴を着けています。庶民の扮装という約束です。

③不思議な子供の登場 宗近が向かって左側に行こうとすると幕が上がり、前半の主人公の子供が登場します。宗近に呼びかけるのですが、このように主人公が呼びかけながら登場する形式を「呼掛け」と言います。能面は童子といい、ほおがふっくらとしたものを用います。ほおがふっくらしていることで、少年であることを表現します。能では主人公をシテと言いますが、能面はこのシテ、もしくはシテツレと言われる主人公に準ずる役を演じる役者のみが用います。

④不思議な剣が平和を回復した例 この少年は、一緒に剣を作るものがないという宗近の悩みを全て見通しています。そして、日本武尊が草薙の剣の力で敵を滅ぼして国土に平和をもたらした例を語ります。主人公は扇を剣のように使って日本武尊が草を薙いで敵を滅ぼした様子を語ります。このように所作を伴ってある物語を語ることを仕方話と言います。

⑤少年が消える 少年は宗近に、剣を打つ壇の準備をするように言って姿を消します。姿を消す前、足を抜くような所作をしますが、これは正体が獣であることの表現です。姿を消すときにかかとを上げ、細かく足を使って歩きますが、これは「狐足」といい、この少年の正体が狐であるということを表現しています。

⑥宗近の祈り 囃子方がノットの囃子を演奏します。この囃子は、神に祈りを捧げているという状況の時に使われる音楽です。宗近の帽子は風折烏帽子です。宗近は厚板という着物の上に長絹を着ています。これで鍛冶の仕事着を着ていることを表現します。宗近が座っている台は一畳台といい、畳一つ分の大きさです。ここにしめ縄がかけられ、鉄床と太刀身・槌という鍛冶の道具、祈りのための幣が置かれています。宗近が「神様に謹んでお願いいたします」という内容の「謹上再拝」という詞を謡うと、囃子が早笛に変わります。早笛は、神・鬼・亡霊などの不思議な力（神通力）を持った者が、急いでやって来るときに用いられる囃子です。

⑦稲荷明神の登場 後半の主人公である稲荷明神が登場致します。このビデオの小鍛冶

は「白頭」という特殊演出になりますので、稲荷明神は白狐であるという約束になります。頭は白頭という長い毛になり、面は泥小飛出といい、金泥を塗った、丸い目で口を大きく開いた面となります。小飛出は活発に動く活動的な神に用いる面ですが、金色で彩色することにより、普通よりも身分の上った神であることを表現しています。

⑧舞働き 稲荷明神が活発に舞います。この部分は舞働といい、神の勇ましい様子を表現する場面になります。稲荷明神は狐の化身であります。この「白頭」の演出の場合は、通常の舞働と異なり、全て狐足を用います。「狐足」は能楽師にとって、高度な技量の要求されるものです。

⑨太刀の制作 宗近は稲荷明神の助力を得て剣を打ちます。剣は稲荷の神体で、小狐丸と名づけられ、院の使いに手渡されます。明神は雲に乗って東山に帰ってゆきます。足でまたぐ所作をすることによって、雲に乗ることを表現します。国土が豊かに平和になることが約束され、一曲は終曲を迎えます。

4 狂言《附子》解説ビデオのナレーション原稿

狂言はせりふを中心とした劇であり、「語り」の芸としての要素が強い。能に比べてテンポが速く、せりふもわかりやすい。とはいえ、古典劇であるから用いられる言葉は当然古文である。また掛け軸を破るところなどには擬音を用いる。また壺から砂糖を取って食べるなど所作(動き)に関する約束事もある。このような狂言の性格から、《附子》の解説も、動画の部分では、難しい詞・擬音・所作の解説が主になる。粗筋については、最初に静止画の部分を作ってそこで解説することとした。以下、その原稿を挙げる。

I 静止画部分

山一つ向こうに用事で出かける主人は、自分の留守中に大切な砂糖を食べられないように、「これは猛毒の附子だ。」と嘘をついて出かけます。附子とはトリカブトからとる毒薬です。ところが太郎冠者と次郎冠者は、これが砂糖だと気がついてみな食べてしまいます。食べてしまったから言い訳を考えます。相撲を取っていて主人が大切にしていた掛け軸と天目茶碗を割ってしまい、申し訳なさに死のうとして附子を食べたことにしようと言うのです。申し訳なさに死のうと思って食べたと言われては、主人も怒ることが出来ません。主人よりも家来の方がしたたかだという狂言の名作です。

II 動画部分

①最初に主人が登場します。主人は長い袴、主人は用事があって、山一つ向こうに行くので、家来の太郎冠者と次郎冠者に留守番をするように言います。狂言では主人を「頼うだ方」と言います。主人の袴は長く、家来である太郎冠者・次郎冠者の袴は短いです。袴の長さによって登場人物の身分を現します。主人は、留守の間この附子の番をするようにと言いつけてゆきます。附子とはトリカブトの根から作られる猛毒です。ここで附子とされているものは「鬘桶」と言い、もともとは能や狂言で使われるかつらを入れてあったものです。現在では舞台上でいすとして座ったり、また蓋を盃として用います。家来は主人がなぜ附子のような猛毒を持っているのか不思議に思いながらも、留守をすることにします。

②家来たちは附子に興味を持ちます。「風にあたってさえ滅却する。」「滅却」とは「死んでしまう」という意味ですが、それならば、風に当たりさえしなければよいのだと言って、二人で扇であおぎながら附子の紐を解き、桶を覗きます。桶には黒いどろっとしたものが入っています。太郎冠者はそれを見て、「うまそうなものだ」と思います。次郎冠者と二人で附子の側を去る時に、太郎冠者だけが一瞬桶を覗き込みますが、これが「附子の魅力に取り付かれた」という表現になります。

③太郎冠者は次郎冠者の止めるのを聞かず、附子に近づいて食べてしまいます。太郎冠者が次郎冠者の手を振り払う部分は「名残の袖を振り切りて」という謡になっていますが、「もう永遠の別れになるかも知れないが」という意味内容です。死ぬ覚悟で食べるのだと言う意味ですが、主人が毒だと言っていた附子の正体は、実際にはおいしい黒砂糖でした。

④家来たちは中の黒砂糖を全部食べてしまいます。扇を底でこつんと当てることによって、黒砂糖がなくなったことを表現します。

⑤主人が「猛毒の附子だからそばに寄るな」と言って、後で自分だけ食べようと思っていた黒砂糖を食べてしまった以上、なにか言い訳を考える必要があります。太郎冠者は次郎冠者に、床の間の掛け軸を破るようにいいます。掛け軸は主人が大切にしているもので、高価な品です。舞台では掛け軸の本物を破るのではなく、それを身振りと言で表現します。「掛け軸はびりびりになった。」という表現です。

⑥掛け軸のみならず、太郎冠者は床の間の天目茶碗とその台を割ろうと言います。いずれも非常に高価なものです。台と天目茶碗が割れる様子も、身振りと言で表現されます。「どちらも粉々になった」という表現です。

⑦主人が帰ってきます。主人は二人が泣いているので不思議に思います。太郎冠者が相撲を取っていて、大切な掛け軸と天目茶碗とその台を壊してしまったことを言います。主人が「お前たちを生かして置けない」と怒るので、「死のうと思って」附子を食べたと言います。主人が出かける前に言った通り、もし桶の中のものが本物の猛毒の附子であったならば、二人は死んでいるはずで、ここで怒ったならば、主人も家来たちに嘘をついていたことを認めたことになります。太郎冠者と次郎冠者は「全部食べたけれど死ねないことは素晴らしい、なんと健康なことだろう。」と主人をからかいます。主人は怒って二人を追い込み、この曲は終了致します。

5 能《小鍛冶》のイヤホンガイド

ビデオを用いた事前学習は当然必要だが、当日イヤホンガイドで解説すれば、さらに理解が深まるであろうと期待される。名古屋能楽堂には、イヤホンガイドの設備が整っていることから、ビデオ素材の撮影の際に、能《小鍛冶》のイヤホンガイドを行った。

イヤホンガイドの内容は、

- ①シテ（主役）・ワキ（相手役）など登場人物の装束の名称とそれを用いる意味
- ②用いられる能面の名称とそれを用いる意味
- ③所作・舞などの名称とそれを用いる意味
- ④謡曲の詞章の現代語訳

となる。このうち、④の現代語訳は、能を見慣れている人にとっては、役者の謡とイヤホ

ンガイドがかぶって却って邪魔に感じられることもある。また、静かな場面などだと、イヤホンから音が漏れて周囲の観客に迷惑をかける場合がある。飯塚が名古屋観世九阜会でイヤホンガイドを務めさせていただく場合は、囃子のある部分のみ現代語訳を行うこととしている。ただし、今回は全くの初心者を対象としているので、全ての部分を対象に現代語訳を行った。この現代語訳は『謡曲大観』¹⁾を参考としている。

以下、当日用いたイヤホンガイド原稿を挙げる。

(1) 「お調べ」の説明

囃子方が楽器を調べる、お調べという囃子が聞こえてまいりました。これは楽器の調子を整えるという意味とともに、開演が近いという合図にもなっております。

(2) 粗筋

最初に物語の筋について、簡単に述べておきたいと思います。三条の小鍛冶宗近は剣を打って差し上げるようにと言う天皇の命令を受けました。しかしながら、名剣を打つために必要な、優れた「相槌」、これは一緒に剣を打ってくれる人のことです、がおりません。そこで稲荷明神に祈願にでかけます。すると気高い童子が現れて激励の言葉をかけます。童子は中国・日本の名剣が敵を滅ぼして世に平和をもたらした故事を語り、心配なく準備をするように述べて消えます。宗近が帰宅して用意を整えて待つと、明神の化身の狐が現れて相槌をつとめ、名剣、小狐丸を仕上げます。

(3) 囃子方の登場

幕を片方のみ揚げて、囃子方が登場致します。笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・笥鉦一の各師となります。

(4) 一条院の臣下 [脇ツレ] の登場

最初に一条の院に仕える橘の道成が登場します。高安流脇方の栢元正樹師が務められます。そして、一条院が不思議な夢を見たので、三条の小鍛冶宗近に剣を打たせるようにという命令をもって、宗近の家に向かいます。

〈訳〉私は一条院に御仕え申し上げる橘道成です。さて今夜帝には不思議な夢のお告げをお受けになったので、三条の小鍛冶宗近に御剣を打たせるようにという御命令でありますので、いま宗近の家に向かいます。

(5) 宗近 [ワキ] に院の命令を伝える

臣下は宗近の家に着き、一条院の命令を伝えます。宗近は、高安流脇方飯富雅介師が務められます。天皇からの命令を受けることは、その時代一番の鍛冶であると認められたわけで、大変名誉なことですが、しかしそれだけに責任があります。それだけの優れた剣を打つためには、自分と同じか、それ以上の技量を持つ鍛冶、相槌が必要なのですが、それがいないと言います。天皇の使いは、天皇が見た不思議な夢のことでもあるのだから、それを頼みにしてその頼みを受けなさいと言います。宗近は、断わることもできず、命令を受けることにします。

〈訳〉「もしこの家に宗近はいますか。」「宗近をお呼びとは、どなたですか。」「これは一条の院からのお使いです。さて帝は今夜不思議な御告げをお受けになりましたので、三条の小鍛冶宗近に御剣を打たせるようにとの御命令です。急いで剣を作ってください。」「御命令はありがたく承りました。そのような剣を作りますには、私に劣らないような優れた技量を持つものが相槌をいたしましてこそ、剣も立派に出来るのであります。そのような相

槌がおりませんので、この御命令はなんとも御返事が出来ないのであります。」

「まったくあなたがおっしゃるのはもったもではあるのだけれど、帝に不思議な夢の告げがあったのだから、それを頼もしく思ってすぐにお受けするように。」と、再び御命令があったので、「このように仰せられますと、宗近としましては、お受けすることもお断りすることも出来かねて、ただ心が乱れるのであります。しかし、政道の正しい現在の御世でありますから、或いは奇跡が起こるのではないかと、そればかりを頼みに致すのであります。」

(6) 稲荷明神に参詣する道で不思議な童子〔前半の主人公＝前ジテ〕に会う

宗近は、大変な仕事を引き受けてしまったと思います。このような大切な仕事を無事につとめるためには、神様の助けを得るほかはないといえます。自分の氏神は、稲荷明神であるので、これから稲荷明神へ祈りに行こうといえます。

稲荷に祈りに行こうとしたところに、いきなり不思議な子供に呼び止められます。能では主人公をシテと言いますが、この童子を前半のシテ、前ジテといえます。面は童子です。喜多流シテ方の長田驍師が務められます。

〈訳〉「言葉もない。思いもよらない重大な仕事を仰せつけられたものだ。このような大事には、神様の力をお願いする以外に方法がないと思います。私の氏神は稲荷明神であるので、これからすぐに稲荷明神に参詣し、お祈りしようと思います。」「おいおい、そこを行かれるのは三条の小鍛冶宗近ですか。」「これは不思議だ。ただ人でない尊い方が、私の名をさしてお呼びになります。どのようなお方なのでしょう。」「雲の上にも喩えられる身分の高い天皇から剣を打てとあなたにお言いつけになったなあ。」「なんと御存知ですか。それにつけてもいよいよ不思議に思います。剣を打つようにという御命令もたった今ですのに、はやくもご承知とは。まったく不思議です。」「成る程不思議に思うのももったもだが、自分が知ればほかの人までも、天に声がすれば地に響くように、壁に耳があり、岩が物を言うという諺ではないが、秘密は隠そうとしても隠せるものではないのだ。とくに天皇からの剣の御用を承ったのだから、そのような名誉が人に知られないはずはなく、また神仏の助けの光がささないはずはないのである。ただ、頼もしく思うが良い。わが大君の深い御恵みがあるのだから、御剣も思うように打ち上げられないはずはないのだ。」

(7) 童子が宗近に剣が世の中に平和をもたらした例を語る

この部分からは、剣の役割について語る部分になります。剣という物は、天皇に逆らう物を退治して、国土に平和をもたらす物であるというイメージがあります。

《(7-1) 中国において剣が平和をもたらした例 豊田市の中学生向けの上演ではカットされた。〈訳〉一体剣の威徳というものは実に尊いもので、漢の高祖はわずか三尺の剣で易々と秦の乱世を治め、また随の煬帝はけいの剣で周の天下を奪ってしまった。その後唐の玄宗皇帝の時にも、鐘馗大臣は剣の徳によって、その亡魂が皇帝を守護し奉ったわけで、魑魅魍魎や鬼神のような恐ろしいものであっても、剣の光には恐れをなして、悪事をなすことはできないものなのだ。このように、中国でも日本でも、剣の威徳と言うものは、申すまでもなくあらたかなものなのだ。》

(7-2) 草薙の剣の威力 前半

童子はここから、天皇の象徴である三種の神器のひとつ、草薙の剣の話をしてします。日本武尊が草薙の剣を用いて朝敵を倒したことを記念して、天皇の狩の行事が行われるように

なつたと述べます。

〈訳〉またわが国のことを言えば、昔、天皇が人の世になってから十二代の景行天皇の子で、御名を日本武尊と申した方が、東の朝敵を討ち滅ぼすようにという天皇の命令を受けて逢坂の関から東国に出発なさったのだが、伊勢や尾張の海岸に打ち寄せる波を見ては、波が帰って行くことをみて羨ましく思い、自分もいつ都に帰ることが出来るだろうかと思ひながら旅を進められたのだが、そのうちにいたる所で激戦が行われ、人も馬も隠れ家の岩窟に折り重なって身体を碎かれるような様子で、流れる血は中国のたく鹿の戦いもこのようであったかと思われるほど大量で川のような様子であり、その血染めの波が死者の持っていた楯を流してしまうほどの合戦がもう数回になった。ついに朝敵も兜を脱ぎ、刀を捨て、武器を捨ててみな降参したのである。この日本武尊の東国征伐の記念として、天皇の狩りの行事が始められたのである。

(7-3) 草薙の剣の威力 後半

童子は日本武尊が草薙の剣を用いて戦った様子を、扇を剣に見立てて所作を交えて語ります。このような所作を交えた語りを仕方話と言います。語り終わった童子は、あなたが天皇の命令をうけて打つその剣も、草薙の剣に劣らないほどの名剣になるといいます。そして宗近に、安心して自宅に帰るが良いといひます。

〈訳〉その時の激戦は陰暦十月の二十日頃、今の十一月の二十日過ぎあたりのころであったから、四方の紅葉も枯れて散ってしまい、遠くの山に薄く雪がかかった様子を尊が眺めていらっしやると、敵は尊の四方を取り囲んで、枯れ野の草に火をつけたので、火炎は盛んに燃え上がった。朝敵は攻め鼓を打ち、なおなお火を放って尊に攻めかかった。尊は剣を抜いて、あたりの草を払い、「すぐに炎も立ちのけ」と、四方の草を薙ぎ払うと、剣の精が強い風となって、炎も草も敵の方に吹き返し、その炎は天に光り、地にいっぱいになって、猛火が敵を焼いてしまったので、数万人の朝敵はみなここで焼け死んでしまったのだ。

その後は天下が泰平で、盗賊の心配もなく、人々も安心して夜、戸締まりをすることを忘れるようになったというのもこの草薙の剣のおかげであると言うことだ。いまあなたが打つであろうそのめでたい夢のお告げによる剣も、どうして草薙の剣に劣ろうか。刀鍛冶の家業を伝えてきた宗近よ、安心して自宅に帰られるがよかろう。

(8) 童子が姿を消す

宗近は、童子にはどなたなのかと聞きます。童子は、答えず、剣を打つ壇を飾り、剣を打つ準備をするようにいひます。そして自分を待っていたならば、必ず助力しようと言って消えてしまいます。この部分の囃子を来序と言ひます。

〈訳〉「中国と我が国において名剣が敵を滅ぼして平和をもたらした威徳を伺いましたのは、この場合大変有り難いお祝いであります。ところで、あなたはどのような方なのですか。」「いや誰であったとしても良い。ただ、頼みに思ひなさい。それよりもまず命令の剣を打つ壇を飾って、その時に自分を待ちなさったならば、神通力で身を変えて、きっとその時刻に参って力添えを致しましょう。お待ちなさい。」と、言うかと思うと夕方の雲のかかった稲荷山の中に、行方も知れずいなくなってしまうそう。行方も知れずいなくなってしまうというのである。

(9) 末社の神（間狂言）の登場

稲荷明神に仕える末社の神が登場致します。そして、稲荷明神が都の守り神であり、霊

験あらたかであることを述べます。一条の院がこの程不思議な夢の告げを受けて、宗近が剣を打つことになったこと、それに稲荷明神が力を貸すことが述べられます。間狂言は佐藤融が務めます。面は登髭、末社頭巾をつけ、水衣・括袴・脚半の扮装になります。(間狂言の逐語訳は行わなかった。)

(10) 宗近の祈り

後見が正面に台を持ち出します。これは一畳台といいます。ここに注連縄を張り、台の上には鉄床と槌、刀身と幣が置かれます。天皇の命令の剣を打つ台を象徴させます。宗近は幣帛を捧げて、刀鍛冶の謂れと自分が剣を作る意義を述べ、稲荷明神の助力を祈ります。

〈訳〉宗近は天皇の命令に従って、剣を打つ壇に登り、不浄を隔てるために何重にもしめ縄を張り、四方に神仏の姿を描いて掛け申し上げ、幣を手向けて、「どうか神様、私は非常な幸運を得て、六十六代一条天皇の代に、夢の告げの剣の注文を頂くとこの刀鍛冶として最高の栄誉を得ました。これは全く私自身の力ではありません。そもそも刀剣は、イザナギ・イザナミの二神が、天の浮橋を踏み渡って、この国土をお探りなされた時の御矛からはじまったもので、その後この現世では北天竺の僧伽陀国の波斯弥陀尊者がこの刀鍛冶の業をおはじめになり、天の守るわが日本の子孫に伝えて代が重なって現在に至っているのです。どうか神様このたびのことは私一人の名誉ではありません。恐れ多くもこの日本を治められる天皇の御命令によるのであります。それでありますから十方に満ち満ちた八百万の神々様、唯今の私に力を合わせてください。」と言って、幣を捧げ、天を仰ぎ、地に頭をつけて、「お願いする私の心からの願いを聞き入れてお叶えくださいと、謹みお願い申し上げます。」と言う。

(11) 稲荷明神〔後半の主人公＝後ジテ〕の登場

早笛の囃子で、稲荷明神(喜多流シテ方 長田驍師)が登場致します。本日は白頭という特殊演出で行いますので、稲荷明神の面は泥小飛出、頭は白頭となります。頭に狐戴と言う狐の形の冠を乗せることによって稲荷明神の神体の狐であることを表現します。装束は法被・半切です。狐足といい、踵を上げ、細かく足を使います。稲荷明神は祈っている宗近に声をかけます。

〈訳〉「おい宗近。院の命令による剣を打つ時が天に知られたのだ、頼もしく思うがよいぞ。」

(12) 舞働

登場した稲荷明神は、舞働を舞います。これは神の威力、勇ましさを現します。

(13) 宗近と稲荷明神が刀を打つ

稲荷明神は、壇に上がり、宗近とともに剣を打ちます。そして打ち上がると、二人の作者の銘を打ちます。稲荷明神という神の打った刀がここに完成します。

〈訳〉少年の形をした明神は壇の上に上がって主槌の宗近に三拝の礼をし、さて「御剣を打つための鋼は」と尋ねるので、宗近も喜びに夢中になりながら、鋼を取り出して、第一の槌をはったと打つと、明神がちょうど相槌を打つ。ちょうちょうちょうと打ち重ねた槌の音は天地に響いて、盛んな音がする。このようにして御剣を打ち奉って、宗近は刀の表に小鍛冶宗近と銘を打つ。明神はこの時の弟子であるので、裏に小狐と鮮やかに銘を打った。

(14) 剣を院の使いに渡し、稲荷明神は帰ってゆく

稲荷明神は完成した剣を院の使いに渡します。この剣は、稲荷明神の助力で出来たもので、この剣自体が神の神体と考えられることになります。

〈訳〉「この剣の刃は、雲を乱したような乱れ焼きであるので、天の叢雲の宝剣にもなぞらえ奉るべきものである。これこそ天下第一の名剣で、裏・表二つの銘を打ったこの刀で天下を御治めになれば、穀物も豊かに稔るであろう。この刀はあなたの氏神である稲荷明神の神体で小狐丸と言うのだ。」と述べて天皇からの使いにお捧げし、「では帰ろう。」と言い捨てて、また雲に乗り、また雲に乗って東山、稲荷の峰に帰ったようだ。

(15) 終演後の拍手について

能は余韻を味わう芸術です。宗近、すなわちワキが幕に一番近い松にさしかかるまで拍手はご遠慮下さい。囃子方・地謡方は座を立ったときに拍手頂いて結構です。本日のイヤホンガイドは椋山女学園大学の飯塚が務めさせて頂きました。ご静聴ありがとうございました。

6 イヤホンガイドの課題

この《小鍛冶》を録画した伝統芸能上演会は能楽堂の収容定員を超えるほどの満員となった。このため、会議室にモニターを設置し、そちらで観ていただいた方も多かった。能楽堂のイヤホンガイドは、観客席では通じるが会議室には通じない。また、日本語のイヤホンガイドは5チャンネルの放送だが、前日の名古屋能楽堂定例能では6チャンネルで英語による解説が行われたため、チューニングせず6チャンネルを聞いていた人がいた。このため、解説が聞こえないという苦情も何件か寄せられた。また、間狂言の部分では同時通訳をしなかったが、これについても解説がほしいという声があった。一方、謡の音声に解説がかぶるとうるさいので、イヤホン解説は量を減らすべきだという声もあった。今回は初めて能を観る人を意識して通常よりかなり解説の量を増やした。しかしながら、実際に伝統芸能上演会に訪れた人は、日頃能・狂言に親しんでいた人が割合的に高く、またイヤホンガイドの使用者も初心者はむしろ少なかった。解説の内容や方法について課題を残す結果となった。

7 おわりに

ビデオは作成するのみでなく、実際に生徒に使用して貰い、その反応によって手直しをする必要がある。しかしながら、本原稿の執筆時点（9月末）では、まだビデオそのものが完成しておらず、生徒に鑑賞してもらえないが出来ない。出来るだけ早く完成したいと思う。今回は能の《小鍛冶》と狂言の《附子》を対象としたが、小学生・中学生向けの公演では能の《船弁慶》《羽衣》、狂言の《雷》《仏師》なども上演頻度が高い。このような曲についても解説用ビデオを制作したいと考えている。

補記 本稿は平成 15 年度松下視聴覚教育研究財団研究開発助成「中学生向け能楽入門教材用デジタルコンテンツの開発と活用に関する研究」の成果の一部となる。また、能《小鍛冶》狂言《附子》の上演には東海能楽研究会代表の筧鉦一先生に御尽力いただいた。記して感謝申し上げる。

注

- 1) 『謡曲大観』 第二巻 佐成謙太郎著 明治書院 昭和 39 年 1 月発行 1111-1124 頁